# いなべ市 郷土資料館だより　№3　令和5年12月１日

## 「火の用心」はいつの時代も大事なことですね

先日、畑仕事をしていたら、消防車が何台も連ねて昔ながらの集落の中を巡回して行きました。カッコいいと子どものように思うと同時に年の瀬に向かい、「火の用心」の意識が高まりました。ちょこっと手を振ったら多くの隊員さんがニッコリ反応してくれて、非常時にはこの方々が、こんな狭い路地裏のところまで助けに来てくれるのかと思うと安心だなって感じました。

そこで、今回は郷土資料館に保存されている昔の消防車を紹介します。

## 大正時代の消防車　手引(てび)き腕用(わんよう)ポンプ

腕用ポンプとは、明治時代以降に火災現場で使われていた人力で動かす消防ポンプのことをいいます。腕用ポンプが日本で使用されるようになったのは、明治３年（１８７０）、東京府が腕用ポンプ４台、蒸気ポンプ１台をイギリスから輸入したことに始まります。この消防車は腕用ポンプを大八車に載せたものです。江戸時代から使われてきた竜吐水（りゅうどすい）とは違い、ホースを伸ばして火もとを直接消火するという現代の消防に通じる消防術は歴史上の大きな変化となりました。

このポンプ車は、大正９年に石榑村の消防組に配備されたもので、名古屋にあった合資会社小澤鉄工所が製作しています。すべて手造りで、当時の職人さんの技術の高さと心意気が伝わります。ポンプの両側に木の棒をセットして人の力で上下に動かします。タンクの中の水を使うのと、給水ホースで防火用水槽、あるいは池や川から吸い込むのと切り替えがあります。このタンクの中にはシジミの貝殻がいくつか入っていたので、川や池から給水したと思われます。当時は、このような手動式のポンプが消防団の主役として火災現場で活躍しました。江戸時代の大八車と同じ木製車輪に鉄の箍（たが）をはめたポンプ車を火災現場まで引っ張っていくのも大変な労力であったと感じます。

同じような形式の消防車が市内で見ることができます。役割を最新鋭の消防車に引き継いだとはいえ、近代化のための文化財の一つとして大切にしたいと考えています。

いなべ市
郷土資料館
～員弁の歴史とふるさとの心～
いなべ市藤原町上相場 838 番地
電話 0594 46 2526
E-mail i-kyoudo@m7.cty-net.ne.jp